

2019年9月3日から2021年8月31日（9月1日帰国）まで、オランダ・ライデン大学にて在外研究を行った。以下に、主な研究活動の内容を報告する。

① ライデン大学図書館でのロバート・ファン・ヒューリック・コレクションの資料の調査・分析調査

報告者が資料調査を行ったライデン大学図書館は、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(1796-1866)が日本から持ち帰った文物の多くが当館に保存されたことから、日本を含む東洋関係の一次資料・二次資料の蔵書数ではヨーロッパで一二を争うと言われている。そうした豊富な日本関係の資料を調査する中で、申請者は2016年に編纂されたファン・ヒューリックの蔵書目録に遭遇した。その目録で「日本」に分類されている資料の現物を確認していくうちに、日本古典の刊本はもちろん、写本が複数含まれていることがわかった（90点に及ぶ中国及び日本の貴重書や写本のうち、10点は現存する唯一のものである）。

ロバート・ハンス・ファン・ヒューリック（Robert Hans van Gulik, 1910-1967）は、オランダの外交官として日本に通算12年（1935-42、1949-53、1965-67）滞在した人物である。ファン・ヒューリックは東洋文化の著名な研究者でもあり、主に日本や中国の文学や風俗に関する書物を多数著している。また、ファン・ヒューリックは日本滞在中に膨大な数の日本古典に関わる写本及び刊本、研究書を入手しており、それらは現在、オランダ・ライデン大学図書館、国立博物館、王立アジア美術協会、アメリカ・ボストン美術館に所蔵されている。

ファン・ヒューリックの人生や著作に関する先行研究を調査したところ、欧米圏や中国ではすでに詳細な研究がなされており、ファン・ヒューリックは第二次世界大戦後の東洋史研究の礎を築いた人物として、また、推理小説作家の大家として高く評価されていることがわかった。それに比して、日本では、ファン・ヒューリックは第二次世界大戦直後こそ知識人の中で知られていたものの、その後は忘れられた存在であることも明らかになった。

そのため、ファン・ヒューリックの著作物や蔵書の調査を通じて、ファン・ヒューリックが第二次世界大戦後の国内外の日本古典文学の研究においていかなる役割を果たしたのかを研究する必要があると考えるに至った。

そこで、ライデン大学図書館所蔵のファン・ヒューリックの蔵書写本『源氏物語歌書抜』を取り上げ、当該資料を編集文献学の視座から分析し、その分析結果及び考察を論文にまとめ、2度の国際学会にて発表した。

さらには、欧米圏や中国と日本におけるファン・ヒューリックに関する研究潮流を比較すると、ファン・ヒューリックと日本との関係を明らかにする研究が日本国内外においてほとんど行われてこなかったことが見えてきたため、在外研究後の研究課題の設定も可能となった。そこで、今後もファン・ヒューリックの著書及び蔵書を調査・分析していくことで、①日本古典作品が日本国外においていかなる関心の下でどのような評価を受けたのか、②そうした評価が日本国内における日本古典文学の位置付けにどのような影響を与えたのかという二つの研究課題に取り組む所存である。(当該課題に取り組むべく、2022年度の科研費に申請済み。)

【研究成果】

1. [学会発表] Mariko Naito, "A Framework to Analyze the Way *Waka* Poetics Authorizes Literary Works", Modern Language Association Annual Conference, virtual conference, 9 January, 2021.
2. [学会発表] "Subverting the Japanese Classics: *The Tale of Genji* as Post-Colonial Literature", Association for Asian Studies Annual Conference, virtual conference, 22 March, 2021.
3. [研究論文] 内藤まりこ「葛藤するテキスト—編集文献学によるライデン大学図書館所蔵『源氏物語歌書抜』の分析」『日本文学』70号 2021年4月 1-18頁.

② ヨーロッパ圏および北米圏での文学研究の動向把握と、研究者たちとの共同研究

報告者は、以前より北米圏での日本古典文学研究者たちとの交流を持っており、当地での学会発表や共同研究を積極的に行なってきた。そこで、オランダでの在外研究の機会を生かし、ヨーロッパ圏での研究者たちとの研究交流を深めることに努めた。

後述する通り、報告者の在外研究期間は、コロナパンデミックの拡大時期とまさに重なっていたため、対面による交流を図る機会はかなり限定されてしまったが、それでもオランダの研究者とは今後の共同研究に発展する研究活動を共に行うことができた。また、在外期間中に報告者が発表予定であった国際学会は全て中止・延期・オンライン開催となってしまったが、オンラインでの学会の機会においてはヨーロッパのみならず北米の研究者と共にパネルを組織し、発表を行うなど、限られ

た機会を最大限に活かして研究活動を行うことができた。

【研究成果】

1. [学会発表] “Presence or Representation: the Role of Paratexts in Medieval Japanese Poetry”, Association for Asian Studies Annual Conference, Sheraton Boston, U.S., 20 March, 2020, コロナパンデミックにより中止.
2. [学会発表] “Contesting Translation Strategies on Tradition: Discourses on the Tea Ceremony in Japan” British Comparative Literature Association, Queen’s University, Belfast, 15-17 September, 2020, コロナパンデミックにより中止.
3. [学会発表] ”Poetics of Voices: Metaphysics of Presence in Medieval Japanese Poetry”, European Association for Japanese Studies Conference, virtual conference, 26 August, 2021.

③ 日本語での研究活動

コロナパンデミックにより、多くの学会がオンライン開催に切り替わることで、当初は参加を断念していた日本開催の学会にも参加し、発表することができた。なお、後述するように、報告者はオランダのロックダウンに伴い、2ヶ月の一時帰国を余儀なくされた。日本においても図書館が部分開館となるなど、研究活動を推進するには厳しい状況ではあったが、日本の出版社からの依頼などに対応するなど与えられた環境を最大限に利用して研究活動を行うように努めた。

【研究成果】

1. [学会発表] 「人は鹿になれるのか」シンポジウム「動物のいのち」明治大学中野キャンパス, 2019年11月30日
2. [研究論文] 内藤まりこ「人は鹿になれるのか」『すばる』2019年2月, 100-2頁
3. [学会発表] 「パラテキストとしての注釈-日本中世歌論における〈音声〉現前の論理」、世界文学・語圏横断ネットワーク、オンライン、2020年9月4日.
4. [学会発表] 「古典文学はどのように「研究」されている?」、シーボルト会、オンライン、2021年5月9日.
5. [研究論文] 「源俊頼の連歌論における言語の行為遂行性」『表象』16, 投稿済み・審査結果待ち

以上が在外研究期間中の活動内容の概要である。前述した通り、報告者の在外研究期間は、コロナ・パンデミックの拡大時期にまさしく重なってしまった。オランダは日本が取った対策よりも厳しいロックダウンが数ヶ月に渡って行われ、報告者が研究活動の拠点としていたライデン大学図書館も閉鎖されるなど、オランダでの活動の多くが制限されることとなった。そのため、報告者は日本への一時帰国を余儀なくされたが、外

務省からの渡航禁止勧告に伴い、一時帰国期間を2ヶ月延長せざるを得なくなった。こうした状況下において、報告者が当初予定していた研究活動の遂行は断念せざるを得なくなった。

しかし、そうした中でもオンラインによる開催となった学会は全て出席して発表を行い、国内外の研究者との共同研究も zoom などのアプリケーションを利用して手探りで進めるなど、限られた条件下で実現可能なことを模索し、それらを実行してきたように思う。コロナ・パンデミックはいまだに全世界において収束の気配を見ていない。そこで、今後の研究活動では、在外研究期間の2年間でオランダと日本の二つの社会でのパンデミックの混乱を経験したことを大いに活かしてこれまで以上に活動の幅を広げ、その内容を深化できるように努めていきたいと考えている。